

道徳における偶然性の問題に関する予備的考察

—— 九鬼周造の偶然論を手がかりとして ——

竹中 信介

目次

1. はじめに—人生における偶然性から—
2. 偶然性の考察
 - (1) 偶然性とは何か
 - (2) それは偶然か、必然か—出会いのメカニズムとその心理状態—
 - (3) 偶然と驚きの関係をめぐって
 - (4) 独立なる二元の邂逅—「偶然」の出会いから「間柄」の問題圏へ—
 - (5) 偶然から運命へ
3. おわりに—道徳における偶然性へ—

1. はじめに—人生における偶然性から—

我々の人生は、偶然に左右されることが多分にある。進学や就職といった人生上の進路が決定されるとき、そこに、ある程度の選択への自由な意志があろうとも、「偶然 (contingency)」あるいは「運 (luck)」といった要素に影響を受ける。

例えば、頑張って目指してきた大学受験の当日に偶々熱が出て受験できなくなったり、試験会場に向かう途中で目の前の道行くお婆さんが偶々倒れて、介抱が必要になり、やむを得ず試験が受けられなくなったりする。あのタイミングで熱さえ出なければ、志望大学に合格する可能性があったのにどうして……と悲嘆に暮れることもあるだろう。

しかしながら、そのようにして偶然生じた出来事は、後で振り返ってみると、往々にして自分の人生にとって欠かすことができない重要なものであった、と意味付けするに至ることがある。それはあたかも、今の自分を作るための「運命」であったのではないか、という具合に。例えば、第1志望の大学には合格しなかったけれども、代わりに滑り止めで受験して合格していた第2志望の大学に入学したおかげで、人生上の唯一無二の親友に出会うことになった、あるいは、思いもよらなかった将来の進路と出会うことになった、などということが時として人生には起こる。

このように偶然の出会い / 出合い (邂逅) とは、人生を大きく左右するものであるが、日常生活の文脈において、そういった偶然の要素をことさらに意識することは一般に少な

いのではないか。自分の能力や適性にあった職業を求めて就職活動をしたり¹⁾、職場での仕事のスケジュールを組んだり、取引先にアポを取ったり、プレゼンテーションに向けて準備をしたりといった行為 (action) には、基本的に偶然を排した必然的な志向性が目指されてはいないだろうか。

それでは、道徳についてはどうか。近代の倫理学では、例えばカント (Immanuel Kant, 1724-1804) 流の義務論、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) 流の功利主義が挙げられるが、彼らの理論体系では、自己の主體的な意志²⁾あるいは計算的な思考に基づく必然的・道徳論の主張が前面に押し出されているように見える。その意味では、むしろ、時代を遡って古代ギリシアのアリストテレス (Aristotélēs, 前384-前322) は、「偶然 (αὐτόματον アウトマトン)」や「運 (τύχη テュケー)」³⁾を積極的に問題にし、それらをどう考え、それらとどのように向き合うのか、という課題を提示しているため、彼の倫理説に立ち返ることが適切なのではないだろうか⁴⁾。

本研究の問いは簡潔である。道徳において、偶然性はどのように位置付けられ、またどのような意味を持つのか、ということである。いわば偶然的道徳論の試みである。しかしながら、本稿では、道徳の問題に踏み込む前段として、基本的には「偶然性」そのものを考察の対象とする。「道徳における偶然性」の具体的な考察については、今後の研究に委ねることにし、本稿の末尾において諸課題をまとめて提示することにした。

1) これに関連して、偶然的に発生する事態を積極的に計画に組み入れてキャリアの設計を考えようとする「計画された偶発性理論 (Planned Happenstance Theory)」が、キャリア・カウンセリング理論の専門家であるクラン [ム] ボルツ (John D. Krumboltz) らによって提示されている (Mitchell, Levin & Krumboltz, 1999)。クランボルツによれば、キャリアの8割は偶然 (chance) によって形成される。さらに、彼は、キャリア・カウンセリングにおける偶発性の学習理論を構築した (Krumboltz, 2009)。彼の理論は日本にも輸入され、大きな影響を与えている。最近の著作では、山口周『仕事選びのアートとサイエンス』の第3章「『いい偶然』を呼び込むには？」で、彼の理論が詳しく検討されている。山口がクランボルツの理論の中から、「いい偶然」を起こすうえで注目した視点は、①好奇心、②粘り強さ、③柔軟性、④楽観性、⑤リスクテイクの5つである (山口, 2019, 129-134頁)。これらの視点は、「キャリアにおける偶発性」のみならず、「道徳における偶然性」への応用も考え得るため、今後の検討の際の1つの軸としておきたい。なお、①~⑤の原語とその簡単な説明は以下のとおりである。

1. Curiosity: exploring new learning opportunities
2. Persistence: exerting effort despite setbacks
3. Flexibility: changing attitudes and circumstances
4. Optimism: viewing new opportunities as possible and attainable
5. Risk Taking: taking action in the face of uncertain outcomes” (Mitchell, Levin & Krumboltz, 1999, p. 118.)

2) カントの倫理学をベースに、「意志の倫理学」を体系化したものとして、秋元 (2020) がある。

3) 「偶然 (アウトマトン)」と「運 (テュケー)」については、『自然学』の第2巻第4~6章において詳しく検討されている (アリストテレス, 2017)。それによれば、「偶然」は、動物や無生物にも当てはまるが、「運」は目的を持った行為を意図し得る者に限られている。なお、アリストテレスの「偶然」と「運」の違いについては、九鬼 (1935/2012)、98-105頁、田島 (2006)、58-67頁をも参照。

4) 例えば、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の中で「多くの出来事が偶然の運によって生じるのもまた事実であり、それらの出来事は大小さまざまであるが、小さな幸運であれ、また反対に小さな不運であれ、明らかにそうしたものは、人間の生の方向を変えるほどのものではないけれども、大きな運が、しかも度重なってよき方向に生じれば、人生をより幸せなものにするであろうし (なぜなら、そのようなもろもろの幸運自体が人生に飾りを添える性質のものであるばかりか、それらの活用も美しく、すばらしいものとなるからである)、逆に悪い方向に生じれば、幸いを圧迫し、損なうのである。なぜなら、そうした事態は苦痛をもたらし、多くの活動を妨げることになるからである」(アリストテレス, 2002, 42-43頁)と述べているように、幸福と人生の変転との関連で「偶然」や「運」について語っていることがわかる。道徳論と幸福論の関係、あるいは徳と幸福の関係、さらにはそれらに偶然性や運の要素がどのように関わるのか、という問題は、今後の研究上の軸として考えていきたい。

2. 偶然性の考察

(1) 偶然性とは何か

① 偶然性を考究できる唯一の学問としての哲学

偶然性を考究するうえで、最も有力な手がかりとなる学問領域は何か。本稿では、その考察にあたり、偶然性について多くの講演を行い、多数の論考・論文・著作を世に問うた哲学者・九鬼周造（1888-1941）の説明を参考にしたい⁵⁾。結論を先取りすれば、その学問領域は「哲学」ということになるが、そこに至るまでの理路を押さえていきたい。

例えば、数学の確率論という分野は、偶然の場合を取り扱っている。しかし、確率論の意図は、「偶然を偶然として偶然性において擱もうとするもの」（九鬼、1935/2012、14頁）ではない。確率論の関心は、「一事象の生起および不生起のすべての可能な場合と、その事象の生起する偶然的な場合との間に存する数量的関係ということに尽きている」（九鬼、1935/2012、14頁。）

具体的に言えば、サイコロを1回だけ振って、「3の目」が（偶然）出る確率は、1/6である、と数量的に示せても、偶然性の根底的な意味そのものを掴むことはできない。つまり、確率論とは、「偶然そのものの考究ではない」（九鬼、1935/2012、15頁）のだ。

それでは、量子力学的理論は、偶然性そのものを問題とするのかどうか。九鬼によれば、「量子力学の理論は量子力学的現象として位置と速度との両条件を同時に決定し得ないことを断定し、従って或る度の偶然性の支配を許容するだけのことである。そのいわゆる不確定性原理は偶然性を単に原理として承認しているにすぎない」（九鬼、1935/2012、15頁。）よって、「量子力学的偶然は量子力学そのものにとってあくまでも「不可知な次元」に属するもの」であり、「自己の原理に関する反省を存在の全面にわたって原理的になすことを、量子力学的理論に求めることはできない」（九鬼、1935/2012、15頁）のである。

つまり、「偶然性は科学の原理的与件となることはできても、まさにその偶然性そのものによって、科学には対象として取り扱えないという根源的性格を有ったものである」（九鬼、1935/2012、15頁。）したがって、九鬼は「偶然を偶然としてその本来の面目において問題となし得るものは形而上学としての哲学を措いてほかにはない」（九鬼、1935/2012、15頁）と断言し、形而上学としての哲学のみが、偶然を偶然として問題にできると主張する。

なお、以下でも触れるが、ここで九鬼の言う「形而上学」とは「無」や「否定」を扱える学問、ということの意味する。偶然とは、「無いことができること」をその意味内容として含蓄する。確率論や量子力学的理論では、「無」そのものを扱うことができない。

このような九鬼の主張は重要である。ここで彼は、科学の内部における原理的与件（つまり「偶然性」）の考究不可能性を言っているのだ。実のところ、このロジックは、後に

5) 本稿では、主として九鬼の原著『偶然性の問題』（1935）に依拠して、偶然性について考えるが、適宜、別の論考や論文をも参照する。

「総合人間学」と呼称されるモラロジー (Morality) の創建者で法学博士の廣池千九郎 (1866-1938) が、みずから提示した道徳科学において、「神〈本体〉」という原理的与件について、その直接的な考究を避け、「公理的に仮定」(廣池、1928/1985、222頁)し、聖人の教説(哲学)を導入することによってその本質に迫ったことを彷彿させるものであり、モラロジー研究の文脈にも一脈通じるのである⁶⁾。

以上長くなったが、本稿では、九鬼の説明に依拠し、偶然性を考究するのに最も適した学問として、「形而上学としての哲学」を考察の準拠枠に据える⁷⁾。

②偶然性とは、必然性の否定

九鬼によれば、偶然性とは、端的に言って、必然性の否定である。

「偶然性とは必然性の否定である。必然とは必ず然か有ることを意味している。すなわち、存在が何らかの意味で自己のうちに根拠を有っていることである。偶然とは偶々然か有るの意で、存在が自己のうちに十分根拠を有っていないことである。すなわち、否定を含んだ存在、無いことのできる存在である」(九鬼、1935/2012、13頁、ルビ原文)

このような偶然(性)の定義ほど、簡潔なものはないだろう。要するところ次の2点である。i 偶然(性)とは必然(性)の否定⁸⁾である、ii 存在が自己のうちに十分な根拠をもっていない、つまり否定・無を含蓄する、このことである。無を含蓄するとは言い換え

6) 本稿では適宜、九鬼の思想と廣池の思想及びモラロジーとを対比的に考察しているが、その理由は、下記の通りである。①本稿で中心的に取り上げる九鬼の主著『偶然性の問題』(1935年)と、廣池の主著である『道徳科学の論文』(初版1928年、第2版1934年)の発行時期が近接しており、日本における同時代の思想の比較検討が可能になるため。②九鬼の思想が「偶然」を基調とするのに対して、廣池の思想は「必然」を基調とするため、両者の思想を比較することによってそのコントラストが際立ち、九鬼の偶然性に関する論点が鮮明に浮かび上がると考えられるため。③モラロジー研究の文脈上、道徳における偶然性の問題に焦点を当てた研究は少なく、その意味で、この研究分野の発展に寄与できると考えるため(関連文献に細川、1984がある。ただ、同書は九鬼のように偶然性そのものを考究したのではなく、めぐり合いの原因と構造を明らかにしたものであることを注記しておく)。

なお、廣池以外にも、九鬼と同時代に生きた田辺元(1885-1962)や下程勇吉(1904-1998)ら京都学派の思想圏に属していた人物も、個々の著作において偶然性の問題に言及していることは注目される(例えば、田辺、1961/2010、下程、1970/1991)。彼らの思想と九鬼のその比較については、今後の検討課題としておき、本稿での比較対象としては廣池を中心とする(ただし、田辺については後ほど、若干言及する)。

7) 「偶然」を取り上げる学問領域としては、九鬼が言及した確率論や量子力学以外にも、物理学におけるカオス理論や社会学における複雑系理論がある(ルエール、1991/1993、ワッツ、2011/2014など)が、そこでは、偶然の場合を分析し、未来を予測したり、また偶然の場合に対応したりするが、偶然そのものの本質を明らかにしようと試みているわけではない。本稿の文脈上は、ひとまずそれらの学問領域の詳細な検討を要しないと考えるが、そこで展開されている「偶然の科学的研究」は、人間の生活・生命(life)に直結する重要なものであることを強調しておきたい。例えば、物理学上の難問とされる、大気や河川などの不規則に変動する流れを指す「乱流(turbulent flow)」のメカニズムを明らかにできれば、台風や竜巻などの自然災害における予防行動あるいは危険回避行動、そして人命救助行動に大きな効果をもたらすと考える。このような偶然の科学的、あるいは応用的研究(ムロディナウ、2008/2009、ブルックス編、2015/2016など)については、今後も引き続いて検討を重ねていきたい。

8) ただし、九鬼の「否定(Negation)」は、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831)的な「他在(Anderssein)」つまり「他の在り方」という意味に取らなければならないことに注意すべきである(小浜、2006、6頁、古川、2015、156頁、小浜、2017、2頁)。つまり、偶然性とは必ずしも、「必然性の「排除」」(古川、2015、156頁)を意味しているわけではない。九鬼哲学の研究者である小浜善信によれば、「九鬼は「偶然性」と「必然性」とを排除し合うものとは見ない。それらはいわば一枚の「コイン」の裏表、つまり「現実」の有り様の両面なのである」(小浜、2017、2頁)ということであるため、本稿でのこの後の展開も、この点を念頭に追っていただきたい。次節では、あえて一般的に問われやすい「それは偶然か、必然か」という二項対立的な問いを立て、九鬼哲学における偶然と必然、そしてそれらと運命の結びつきについて明らかにする。

れば、偶然とは「崩落と破壊とを内に蔵する脆弱な存在」（九鬼、1939/2016、130頁）であることを意味する。

偶然性はそのような脆弱さを内に抱えているため、人と人との偶然の出会い（「独立なる二元の邂逅」⁹⁾）は、時に僥倖であり、時に運命であるとも感じられるわけだが、偶然と運命の関係については、後ほど詳しく取り上げようと思う¹⁰⁾。

(2) それは偶然か、必然か—出会いのメカニズムとその心理状態—

一般的に、ある物事を捉えて、それが偶然なのか、必然なのか、という論争は中々決着が付かないことがある。例えば、大学生Aと大学生Bの次のような会話である。A「俺(A)とお前(B)がこの大学のゼミで出会ったのは、単なる偶然だよ」B「いやいや、お前(A)と俺(B)が会えたのは、出会うべくして出会ったんだ。必然だったんだよ」云々。

実は、決着が付きにくい原因は、その議論において「時制」を曖昧にして、偶然か、必然かを主張しようとしているところにあるのではないか、というのが筆者の仮説である。結論から言えば、この両者の言い分はどちらも正しい。以下、順を追って説明したい。

九鬼による必然、可能、そして偶然の区別についての説明は、以下のように明快である。

必然：「必然的存在は過去の時間的地平に存在している。いつでも過去へ帰って行くことができるから必然的存在である」（九鬼、1939/2016、128頁。）

可能：「可能的存在は未来を時間形態としている。可能とは現在における非存在であると共に未来における存在可能である。可能と未来とは不離の内的関係に置かれている。可能とは未来の地平に於て現実となることが可能なのである。可能性とは未来の先取にほかならない」（九鬼、1939/2016、128頁。）

偶然：「偶然性の偶然するのは現在に於てでなければならない。偶然は必然の否定である。必然がその本質の中に過去を担っているに反して、偶然はその本質の中に過去を欠いている。偶然は過去なき現実として現在の瞬間に迸り出るものである」（九鬼、1939/2016、129頁。）

これらに続けて、次の引用が続く。

「要するに必然性は過去よりの存続を仮定している。可能性は未来への動向を表している。偶然性は現在における瞬間的存在を意味している」（九鬼、1939/2016、129頁）

以上から、上記の例の前者Aの言い分、つまり、Bとの出会いが偶然だ、という主張は、「現在」という時制において、大学のゼミでBという人物に会おうという目的を持っていないときに、偶々会ったことを指して、「偶然」だと言っているということになる。逆に後者Bの言い分、つまりAには出会うべくして出会った、必然だという主張は、「過

9) 九鬼 (1935/2012)、134頁 (傍点原文)。

10) 九鬼は『偶然性の問題』において、偶然を「定言的偶然」「仮説的偶然」「離接的偶然」に分類して、非常に詳細かつ緻密な議論を展開しているが、本稿では、それらの議論を逐一追っていくことはしない。本稿で主眼とするのは、この後取り上げていくように、「偶然と必然」「驚きの情」「偶然と運命」「独立なる二元の邂逅」といった視点である。これらは、倫理や道徳の問題にそのまま直結すると考える。

去」において自分（B）は、この大学を受験して入学し、このゼミを選んだ、一方相手（A）も同大学を受験、入学し、何らかの理由で同じゼミに入った、だからその出会いは、「必然」だったと説明できる、というわけである¹¹⁾。

このように説明してみれば、出来事の客観的なメカニズム（機制）自体は、単純である。しかし、AとBの個々の状況や心理状態を見れば、どうだろうか。AがBとの出会いを「偶然」と言った背景には、「必然」と思いたくなかった何らかの理由があったのかもしれない。例えば、入学した大学が第2志望で、入ったゼミも第2希望で不本意であったとしよう。そのように不本意で入った大学・ゼミでBに出会ったことを、決して「必然」だとは思いたくない。だから、ぶっきらぼうに「単なる偶然だよ」と言い放った。逆に、Bには「偶然」と片付けたくない、強い意志があったとも考えられる。それは例えば、Aに対する^{しょうけい}憧憬の念である。Aは、Bにとって、これまで身近で見たことのないような優れた語学力やコミュニケーション力を持った人物で、すぐに憧憬の対象となった。この人こそ自分が学ぶべき人だ、出会うべくして出会った人物なのだと思うようになった。つまり、この出会いは、必然だったのだ、と。

ここまで述べてきて重要なのは、必然を偶然に、あるいは偶然を必然に変えるものは、当事者にとっての目の前の出来事への意味付けである、ということだ。九鬼自身はこのことを「偶然が人間の実存性にとって核心的人格の意味を有つとき、偶然は運命と呼ばれるのである。そうして運命としての偶然性は、必然性との異種結合によって、「必然—偶然者」の構造を示し、超越的威力をもって厳として人間の全存在性に臨むのである」（九鬼、1935/2012、244頁、傍点原文）と力強く語っている。ここからわかることは、九鬼哲学を追っていくうえで重要なのは、「偶然か、必然か」といった二項対立図式で見てもならない¹²⁾、ということだ。

(3) 偶然と驚きの関係をめぐって

① 驚きのメカニズム—偶然だから驚く—

九鬼は、偶然と驚きの関係について、以下のように説明している。

「偶然的存在によって生ずる驚きの情は第一類の情緒である。客体としての存在が何等の必然性によって主体に結ばれていないから、主体の包摂機能にとっては意外なものとして、驚きの情が起るのである」（九鬼、1939/2016、29頁）

端的に言って、「驚きは偶然的なものに対して起る情であるということが出来る」（九鬼、1939/2016、161頁）のであるが、それとは逆に、人は当たり前なものには驚かないため、九鬼は以下のように述べる。

11) ここまでの説明は、経済学者の難波田春夫（1906-1991）が、必然と偶然について「個々の系列をとってみれば、どれもこれも必然の系列でないものはない。しかし、どこでどんな系列と出会うかは、個々の系列の中に前以って考慮に入れておくことはできない。偶然とは、この必然の系列の出会いをいうのである」（難波田、1987/1992、10頁）と述べていたことに、そのまま符合する。なお、ここで引用した難波田論文の文言については、令和元年（2019）6月15日（土）に立木教夫氏（道徳科学研究センター客員教授〔当時〕）から教示いただいたものである。ここに記して感謝したい。

12) 小浜（2017）、3頁も同様の主張をしている。

「偶然的なものとは同一性から離れているものである。同一性の圏内に在るものに対しては、当たり前ものとして、驚きを感じない。同一性から離れているものに対して、それは当たり前でないから驚くのである」(九鬼、1939/2016、165頁)

例えば、日時と場所が決められたミーティングの場で同僚に会うことは、何らの驚きでもないが、街中で友人や恩師にばったり出会うことには驚く。しかも、その街中で出会った恩師が、ふだんは遠く離れたところに住んでいて、めったにその場にはいない、ということであれば、その驚きの度合いは増幅する。「同一性の圏内」を大きく逸脱しているからである。

それとは逆に、意図している、目的を持っている、ということは「同一性の圏内」を広げることを意味する。その意味では、あらゆる可能性を視野に入れて行動する人は、「同一性の圏内」が広く、目の前で起こった偶発的な物事は、それほどの驚きにはならないと言える。九鬼は「何物に逢っても驚かぬということは腹の出来た人間の徳とさえも考えられている」(九鬼、1939/2016、173頁)と述べて、「徳」との関連を示している。

しかしまた同時に、九鬼は「如何に驚きを除いて行っても、なお最後に一つ残って、我々に驚きを迫るものがある。それは現実の世界そのものが驚きを迫るのである。現実の世界そのものに対して、我々は驚きの情を禁じ得ないのである。現実の世界は偶然的存在である。形而上的偶然である」(九鬼、1939/2016、173頁)とも述べており、現実の世界がそのようにあることには、驚かざるを得ない、という考えを示す。これは、別のありようもあったはずなのに、なぜそうあるのか、という驚きである。「なぜ無ではなく、何かが存在するのか」という問いは、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716)¹³⁾、シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)、そしてハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) といった西欧の哲学者と九鬼とを結ぶものである¹⁴⁾。九鬼自身は、紀元前2世紀後半の西北インドを支配したギリシア人の国王ミリンダ (弥蘭) と仏教僧ナーガセーナ (那先) との対話形式で書かれた経典『那先比丘経 (ミリンダ王の問い)』を受けて、なぜ個物があるのか、なぜそれぞれのものがこのようなものとしてあるのか、という問い¹⁵⁾を自身の偶然論の核心部分に据えている¹⁶⁾。

13) ライプニッツは、例えば論文「理性に基づく自然と恩寵の原理」(1714)において、「ここまで私たちはただ自然学者としてだけ論じてきた。これから形而上学へと上らねばならない。その際、一般にはあまり使われていない大原理を用いる。すなわち、何ものも十分な理由がなければ起らない、言い換えれば、どんなことでも、事物を十分に知る者が、なぜこうなっていて別様ではないのかを決定するのに十分な理由を示すことができないう場合には、何も生じない、という原理を使うのである。この原理を認めたらうで当然に問える第一の問いは、何ゆえ無ではなくて、何かが存在するのか、という問いであろう。なぜなら、無のほうが、何かあるものよりも単純で容易だからである。さらに、事物は現実存在しなければならぬと仮定したうで、何ゆえ事物はこのように現実存在しなければならぬ別の仕方ではいけないのか、という理由を示すことができなければならぬ」(ライプニッツ、1714/2019、84-85頁、傍点原文)と述べている。

14) 藤田・田中 (2016)、18頁。なお、ガブリエル・中島 (2020) が、ここに挙げた西欧の哲学者の思想と対比させる形で九鬼の偶然論を現代的視点から再評価しているのは、注目に値する (165-170頁)。

15) 具体的な問いは以下の通り。「『尊者ナーガセーナよ、いかなる理由によって、人々はすべて平等ではないのですか？ すなわち、或る人々は短命で、或る人々は長命です。また或る人々は多病であり、或る人々は病いが少ないです。或る人々は醜怪ですが、或る人々は端麗です。或る人々は力弱く、或る人々は力が強い。或る人々は財少なく、或る人々は財が多い。或る人々は卑賤の家に生まれ、或る人々は高貴の家に生まれます。或る人々は愚かであり、或る人々は賢明です』」(中村 [ほか] 訳、1963、181頁。)

16) 九鬼 (1935/2012)、44-45頁。

こうした論点は、モラロジーとの関連では、廣池千九郎の運命観との比較検討が望まれるところである。廣池の場合、九鬼の「なぜ」という問いには、「人類階級の先天的原因」及び「人類階級の後天的原因」（それぞれ『道徳科学の論文』第3章¹⁷⁾、第4章¹⁸⁾の主題）という視角から切り込むものと考えられる¹⁹⁾。廣池は、この世界がこのようにあることは、「偶然にして然ることは出来ない」という立場を取り、現象の背後に原理や法則を見ようとする²⁰⁾。廣池の道徳科学における偶然性という問題は、運命観のほかにも、因果律の原理の主張とも併せて、総合的に検討する必要があるが、「原因—結果図式（つまり必然論）」は非常に強いと言えそうだ。廣池は目の前で生起する偶然的な要素をどのように考えていたのだろうか。また、偶発的な事態にどのように対処していたのだろうか。これについては、引き続いての検討課題としておきたい。

②驚きという情緒

驚きを情緒と見るか否かという立場の違いは、デカルト（René Descartes, 1596-1650）とスピノザ（Baruch de Spinoza, 1632-1677）の主張の違いに見出すことができると九鬼は見ている。「デカルトが驚きを最も根本的な第一の情緒と見たことは人間学的洞察に基づいている。[...] スピノザが驚きを情緒の一つとして認めなかったのは、必然論の立場にあって、一切の偶然の存在を否定したことに基づいている」（九鬼、1939/2016、29頁。）

この見方は概ね正しい。しかし、「必然論者スピノザにおける偶然性」という問題は、もう少し丁寧と考えられても良いのではないだろうか²¹⁾。

一方、驚きという情緒について、九鬼は日本神話を例に次のように述べている。

「驚きは、須佐之男命すさのおのみことが天にまい上ったとき天照大御神あまてらすおのみかみによって体験された情緒であり、屋根裏から天斑馬あまのふちこまが落ちて来たとき天衣織女あめのみそりめの体験した情緒であり、天沼琴あまのぬことが鳴り響いたとき須佐之男命の体験し、豊玉姫ひこほほでみのみことの産殿を覗いたとき日子穗手見命ひこほほでみのみことの体験した情緒である」（九鬼、1939/2016、29頁、ルビ原文）

九鬼の見るところでは、「『古事記』の神代の巻の体験的記述の中に最も屢々出て来る情緒は驚きの情である」（九鬼、1939/2016、30頁）ということであり、説得的な論述であると考えられる。

③日常生活における驚きの情

次に、日常生活の中での驚きについての九鬼の説明を見てみたい。

17) 廣池（1928/1986a）、本文103-251頁。

18) 廣池（1928/1986b）、1-184頁。

19) 廣池自身の説明によれば、「人類の階級」とは、「ただ上下・貧富の階級というような狭い範囲のものでなくして、人間の賢愚の階級・健康不健康の階級・長命短命の階級・幸不幸の階級等、あらゆる人間の先天的及び後天的における運命」（廣池、1928/1986a、本文105頁）を指し、非常に広い範囲が視野に入れられていることがわかる。その意味で、九鬼（及びミランダ王）の「なぜ」という問いに対して、廣池ならば、人類階級の先天的・後天的原因という視角から切り込むものと考えられる。

20) 廣池（1928/1986a）、序文1頁。

21) これについては、木島（2016a, 2016b）などを参考に、今後の検討課題としておきたい。

「人間の日常生活にあっても、偶然的な外的感覚、またはもっと複雑な偶発的な事象が、普通に驚きの原因となる。例えば、舗装した人道を歩いていて、四角な石の板が一つだけぐらついていたとすれば、その触覚乃至運動感覚が、軽い驚きを感じさせる。更に複雑な事象が驚きの原因となるというのは、例えば二・二六事件を地方に居て初めて聞いた時には大抵の人は驚いたのである。全く思いがけない偶発的なことであったからである」(九鬼、1939/2016、164頁)

この引用は、「生きた哲学は現実を理解し得るものでなくてはならぬ」(九鬼、1930/2009、7頁)という立場を貫いた九鬼の日常感覚の鋭さが光る部分である。しかも、このような具体例は一般人にも分かり易く、二・二六事件(昭和11年[1936])の記述は、当時として時宜を得たものであったと推察される²²⁾。

(4) 独立なる二元の邂逅—「偶然」の出会いから「間柄」の問題圏へ—

①偶然とは独立なる二元の邂逅である

九鬼は「偶然」を形容して、「独立なる二元の邂逅」(九鬼、1935/2012、134頁、傍点原文)であると言っているが、このことを詳しく検討したい。

九鬼が引用している以下の具体例を見ると、独立なる二元の邂逅の意味が知られるだろう。やや長くなるが、一部を割愛して引用する。

「偶然性が甲と乙との二元の邂逅において顕著なる形態を取ることは『饗宴』のプラトンも「個人の運命」のショーペンハウエルもひとしく認識したことである。伊邪那岐、伊邪那美の二神が「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ」といって「天の御柱を行き廻り逢つた」という『古事記』の伝説も印度の昔から行われた儀式であると否とは別問題として極めて象徴性に富んだ原始的な事件である。源氏と空蟬も逢坂の関で「わくらばに行き逢ふ」たのである。「私はKに向って御嬢さんと一所に出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました」(夏目漱石『こころ』)。[...] 一般に偶然そのものの性格として独立なる二元の邂逅という意味構造が目撃されるのである」(九鬼、1935/2012、134-135頁、傍点原文)

九鬼自身、「独立なる二元の邂逅」として具体的に描いていたのは、このような独立した人と人(基本的に男女)が巡り逢う場面である。筆者が例として挙げたのも、お婆さんとの出会い、ゼミでの大学生同士の出会い、街中での友人や恩師との出会い、といった場面であった。他にも、手に入れたかった商品に思いがけない形で出合ったり、偶々通りかかった本屋で手に取った本が今の自分にとって必要な知識を提供してくれたり……などのように意図せざる形での物事との出会いがある。このように、偶然とは、独立なる二元が邂逅する瞬間に成り立つものに他ならない。

22) この二・二六事件についての記述が掲載された論文(「驚きの情と偶然性」)の初出は、昭和14年(1939)2月発行の『哲学研究』誌上である(九鬼、1939/2016、192頁)ため、二・二六事件は当時の人々の記憶に新しい出来事であったと見て差し支えないであろう。

②偶然から間柄へ

ここで「人と人との出会い」というところに話題が及ぶと、さらに考えるべきは、各々の出会いにおける個別な関係性、つまり「間柄」という問題である。例えば、出張先のコンビニで偶々一度限り出会っただけの店員との間柄と、職場で偶々知り合っただけで意気投合して今後も関係性を続けていく同僚との間柄には、大きな違いがあるだろう。

このような「間柄」の問題圏は、よく知られているように、倫理学者の和辻哲郎（1889-1960）の倫理学の対象領域である²³⁾。九鬼の偶然論と和辻の倫理学が手を結ぶところに、筆者の言う「道徳における偶然性」という問題を解く鍵が見出せると考えるが、これについては今後の検討課題としておきたい²⁴⁾。

③偶然性に内在する社会性

ここで1点だけ、「独立なる二元の邂逅」に関連して新たな論点を提示しておきたいのだが、それは偶然性に内在する社会性という問題である。九鬼は、偶然と我—汝、社会性について、以下のような興味深い主張を展開している。

「必然性が同一者の同一性の様相的言表であったに反して、偶然性とは一者に対する他者の二元性の様相的言表にほかならない。必然性は「我は我である」という主張に基いている。「我」に対して「汝」が指定されるところに偶然性があるのである。必然性に終始する者は予め無宇宙論へ到着することを覚悟していなければならない。それに反して偶然性を原理として容認する者は「我」と「汝」による社会性の構成によって具体的現実の把握を可能にする地盤を踏みしめているのである」（九鬼、1939/2016、136頁）

ここには、九鬼の思想における社会性あるいは社会学的視点を、抽象的な次元においてではあるが、見て取ることができる。しかしながら、そこで目されている「社会性」は我—汝という二者関係を基調とするものであり、第三者あるいはそれ以外の複数の他者という視角は読み取ることができない。つまり、現実的で具体的な社会あるいは人間関係のダイナミズムは掴まれていないのである²⁵⁾。確かに、「社会性の構成」をその方向に拡張していけば、九鬼の念頭には、論文「日本的性格」における「日本国民」（九鬼、1939/2016、317頁）、あるいは『「いき」の構造』における「大和民族」（九鬼、1930/2009、18頁）のようなマクロな社会的集合体があったのは間違いない。そこにこ

23) 和辻は、「倫理問題の場所は孤立的個人の意識でなくしてまさに人と人との間柄にある。だから倫理学は人間の学なのである。人と人との間柄の問題としてでなくては行為の善悪も義務も責任も徳も真に解くことができない」（和辻、1937/1965、12頁、傍点原文）と述べているように、「間柄」にこそ倫理問題を解く鍵が存するという立場を取っている。

24) 九鬼の「偶然」と和辻の「間柄」の交錯するところに焦点を当てた論文としては、宮野（2016）が参考になる。また、同論文の著者である哲学者の宮野真生子（1977-2019）の遺作（著者の逝去後に出版）『出逢いのあわい—九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』（2019）は、九鬼の偶然論に関する非常に緻密な研究であり、やはり和辻の「間柄」への言及もあり、参照すべき点が多いことを注記しておきたい。なお、生前の宮野の著作には『なぜ、私たちは恋をして生きるのか—「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史』（2014）があり、やはり九鬼と和辻の哲学への言及があるため、参照を乞う。

25) ここに示した筆者の論点は、田辺元が論文「社会存在の論理」において「「我と汝」の交互相関の論理は、社会存在の論理としてなお甚だ不十分なる、最も抽象的の形態であるといわなければならない」（田辺、1934-35/2010、27頁）と述べたことに通じるのであるが、この部分の田辺の批判は、九鬼自身ではなく西田幾多郎

そ、九鬼による「具体的現実の把握」が見られるのは確かであるが、ミクロな次元での第三者・複数の他者との交流という視点が見られるのかどうかについては、疑問が残る。この問題は、本稿の主題である偶然性の議論を大きく越え出るため、別稿にての検討が望まれる²⁶⁾。

(5) 偶然から運命へ

偶然性の問題を考察するにあたり、押さえておくべきものとして、本稿で何度か触れてきた「運命」という概念がある。偶然と運命は、どのように関わるのだろうか²⁷⁾。

先ほども引用したが、九鬼は「偶然が人間の実存性にとって核心的全人格的意味を有つとき、偶然は運命と呼ばれるのである」(九鬼、1935/2012、244頁)という理解を基本に据える²⁸⁾。また、その時の条件として、ハイデガーに依拠し「運命とは先駆的決意性の中に内在して初めて運命となるのである」(九鬼、1935/2012、254頁)と述べている。これはつまり、運命とはただ受け取るものではなく、未来に向けて自分が先駆けていくことで初めて意味付けられることを示している。また、九鬼は「我々は偶然性の驚異を未来によって倒逆的に基礎づけることができる」(九鬼、1935/2012、281頁)とも言っている。

九鬼の偶然論の研究者である古川雄嗣の言い方に従えば、不断の「偶然の必然化」の実践が運命である、ということになる(古川、2016、157頁)。受け取った偶然を、未来に向けて必然的に組み立てることで、「偶然」は「運命」に変容する。

九鬼自身、同じことを「無を内に蔵して滅亡の運命を有する偶然性に永遠の運命の意味を付与するには、未来によって瞬間を生かしむるよりほかはない。未来的なる可能性によって現在の偶然性の意味を奔騰させるよりほかはない」(九鬼、1935/2012、282頁)と述べている。

九鬼は『偶然性の問題』の最後において命令形で次のように言う。「遇うて空しく過ぐる勿れ」(九鬼、1935/2012、282頁)²⁹⁾と。

3. おわりに—道徳における偶然性へ—

我々人間存在は、この一瞬一瞬において生を営んでいる。言い換えれば、過去や未来に

(1870-1945)の論文「私と汝」(1932)の内容に向けられたものと目される点には注意が必要である(田辺、1934-35/2010、450-451頁[編者藤田正勝の注解を参照])。なお、九鬼『偶然性の問題』と田辺「社会存在の論理」の対比的考察については、宮野(2018)を参照。

26) 九鬼の哲学を「社会学」の文脈で捉えたものは、管見の限り存在しないが、「倫理学」として捉えたものとしては、古川(2015)がある。関連で、和辻の哲学(倫理学)を「社会学」として捉え直そうとする試みには、犬飼(2016)があり、その試みはある程度成功していると考えられる。九鬼における社会性(あるいはその欠如)・社会学という問題は、引き続き検討を重ねていきたい。

27) 本稿で、偶然と運命の関係性、あるいは人と人との出会いに着目したきっかけとしては、哲学者の木田元(1928-2014)の著作『偶然性と運命』(2001)によるところが大きい。彼は、同書で「めぐり逢いの現象学」や「偶然性の概念」、「(運命)の思想史」といった主題で、めぐり逢い、そして偶然と運命について論じている。

28) ラジオ講演を基にした「偶然と運命」という随筆では、より平易な言葉で「偶然な事柄であってそれが人間の生存にとって非常に大きい意味をもっている場合に運命というのであります」(九鬼、1937/1991、78頁、傍点原文)と語っている。

は生きていないことを意味する。現在という瞬間にこそ、「偶然」という人生を左右する要素が顔を覗かせる。偶然とは、その瞬間ごとには「驚き」であり、ときに「運命」にも変容する。問題は、そこにどのような意志を吹き込むのか、ということである。

しかしながら、その偶然を「必然化」し、「運命化」するのがためられる場面が人生にはある。それは、「不運（不幸）な偶然」と呼ばれるものである。偶然、トンネル内に自動車で居合わせたため、天井の崩落事故に巻き込まれて怪我を負ってしまうこと、あるいは普段はその場所にいないのに、偶々そこに居合わせたがために地震に遭い、亡くなってしまうこと……などである。後者の場合、亡くなった当人ではなく、その遺族、残された最愛の人たちにとって、そこで起きた偶然を未来に向けて必然化、運命化することには、大きな困難が伴うことになる。その時の偶然は、それこそ「遇うて空しく過ぐる」ことができない事態として当事者を襲う。「本当は空しく過ぎれば良かった」と思う当事者には、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令形は、時として暴力的に響いてしまうのだ。このことは、強調しておかねばならない。

筆者自身、周囲で不運（不幸）な偶然を何度も耳にし、目にしてきた。記憶に新しいところでは、筆者が大学生のとき（平成 17 年 [2005]）に起こった JR 福知山線の脱線事故に巻き込まれて亡くなった方のなかに、筆者と同じ大学に通う先輩が含まれていたという事実が思い起こされる。その時の「驚き」は、あれから 15 年を経過した現在（令和 2 年 [2020]）でも鮮明に記憶している。また、平成 23 年 [2011] に起こった東日本大震災の際には、多くの不運（不幸）な偶然があったと推察する。「この場所」「この瞬間」における独立なる二元の邂逅（九鬼、1935/2012、278 頁）としての偶然性が、人々の生死を分けるに至った事実には、深く想いを致し、向き合い続けなければならない。そうすることこそ、一人ひとりの尊厳ある「心の復興」につながる可能性が秘められていると考える³⁰⁾。

以下に今後の課題をいくつか挙げておきたい。本稿では、「偶然性」について具体的に考察することができた。しかし、最終的に筆者の狙いとする本研究の主題は、「道徳における偶然性」を考察することである。本稿でも触れたが、人と人との邂逅において、間柄の問題、そして倫理の問題が問われることになるため、今後は偶然の出会いにおける間柄・倫理、そして道徳へと議論を展開していきたい。

さらに、「道徳における運」という問題をも考えなければならない。運と偶然性の類似

29) 「出会ったものをむなしく通り過ぎるな」（竹内、2016、188 頁）という意味。

30) ここまで記してきた「不運（不幸）な偶然」とどう向き合うのか、あるいはそのような偶然を必然化しないしは運命化できるのか、という論点は、古川（2015）が自著の「結論」部分で示した立場に通じ、スピリチュアル・ケアの理論と実践、フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905-1997）の哲学・精神医学の問題圏に直結する。以下に古川の立論を引用しておく。

「今日盛んにその必要が力説される傾向にあるいわゆるスピリチュアル・ケアをめぐる諸々の理論と実践にせよ、その文脈で再評価の機運もあるヴィクトール・E・フランクルの哲学ないし精神医学にせよ、そこで問題にされていることは、ほとんど常にと行ってよいほど、典型的な偶然の必然化の論理による「生きる意味」の生成と自覚の問題にはかならない。この観点から言っても、九鬼の哲学が偶然性という問題を主題化しているからこそ、それを出発点として、いかにいかなる道徳的实践とそれに基づく生の目的必然化があり得るのかという問題にこそ、焦点が置かれなければならないと思われる」（古川、2015、315 頁）

点と相違点については、厳密に考察しなければならないが、いまは運と偶然性を近似的概念として捉え、筆者と問題意識を同じくする論者として、法哲学者のジョエル・ファインバーグ (Joel Feinberg, 1926-2004)、哲学者のバーナード・ウィリアムズ (Sir Bernard Arthur Owen Williams, 1929-2003)、同じく哲学者のトマス・ネーゲル (Thomas Nagel) の名前を挙げておきたい。彼らは総じて、「倫理や道徳をめぐる近現代の議論の主流が運の問題をなおざりにしてきた」³¹⁾と理解する立場を取っている。‘Moral Luck’ という、日本語では「道徳的な運」と訳される問題がある。これは、道徳実行の「当事者が自分の自由な意志による選択と信じていることでも、それは自分ではどうしようもない外的な諸要因によって部分的に、あるいは全面的に、影響を受けている」³²⁾という基本的な立場において、「外的な諸要因」すなわち運の要素に鑑みて、道徳について議論しようとするものである。なお、日本では、哲学・倫理学が専門の古田徹也が、この分野の研究を進めており、昨年 (2019 年) 『不道徳的倫理学講義—人生にとって運とは何か』を上梓している。彼らの研究内容の精査も今後の検討課題としたい³³⁾。

最後に、上記のような議論は基本的に個体発生のレベルで展開されるのが常だが、系統発生のレベルつまり進化的視点との関連で、「進化における偶然性の問題」という課題を挙げておきたい。これについては、「進化 (evolution)」自体が、何らかの目的を持たず、偶然に進んできたものである、という理解をベースに置くものである。その立場を前面に出しているのは、例えば J. モノー (Jacques Lucien Monod, 1910-1976) 『偶然と必然』³⁴⁾、竹内啓 『偶然とは何か—その積極的意味』³⁵⁾ などである。また、「道徳の起源と進化」という主題で言えば、進化心理学者のクレブズ (Dennis L. Krebs) は *The Origins of Morality* において、道徳 (利他行動 altruistic behavior や協力 cooperation) は偶然的な要因 (何らかの要素 [従順さ docility や理性 reason など] に付随して生じた副産物 incidental by-product) とともに創発し、進化してきたのではないかと示唆している (Krebs, 2011, 10 章と 11 章) ため、これについても今後の検討課題としたい。

参考文献一覧

邦文：

秋元康隆 (2020) 『意志の倫理学—カントに学ぶ善への勇気』、月曜社。

アリストテレス (2002) 『ニコマコス倫理学』、朴一功訳、京都大学出版会。

アリストテレス (2017) 『自然学 (新版 アリストテレス全集第 4 巻)』、内山勝利 [ほか] 編、岩波書店。

犬飼裕一 (2016) 『和辻哲郎の社会学』、八千代出版。

31) 古田 (2019)、283 頁。

32) 古田 (2019)、285-286 頁。

33) Feinberg (1962/1970)、Nagel (1976/1979)、Williams (1976/1981)、古田 (2017) など。

34) 「生物という、きわめて保守的なシステムにたいして進化への道を開くきっかけを与えた基本的な出来事は、たんに微視的な偶然的なもので、それが目的論的な機能にどんな影響をもつかどうかには、まったく無関係なものであった」(モノー、1970/1972、137 頁)

35) 「進化の方向は常にデタラメに選ばれるのであり、その中でたまたまより良い方向を選んだものだけが生き残って、結果としてよりよく適応したものが現れるのである」(竹内、2010、131 頁)

- 小浜善信 (2006) 『九鬼周造の哲学—漂泊の魂』、昭和堂。
- 小浜善信 (2017) 「九鬼周造における「永遠回帰の思想」」『理想』No. 698、理想社、2-16頁。
- ガブリエル、マルクス・中島隆博 (2020) 『全体主義の克服』、集英社 (集英社新書)。
- 木島泰三 (2016a) 「偶然性としての必然性: スピノザによる必然主義からの目的論批判と、その古代エピクロス主義との親近性」『法政哲学』、法政哲学会、1-12頁。
- 木島泰三 (2016b) 「スピノザにおける偶然性の意義: 有限者における偶然性と必然性との創造的結合と、その古代および近代エピクロス主義との比較」『法政大学文学部紀要』vol. 72、法政大学文学部、59-76頁。
- 九鬼周造 (1930/2009) 『「いき」の構造 他二篇』、岩波書店 (岩波文庫)。
- 九鬼周造 (1935/2012) 『偶然性の問題』、岩波書店 (岩波文庫)。
- 九鬼周造 (1937/1991) 「偶然と運命」『九鬼周造随筆集』、岩波書店 (岩波文庫)、69-81頁。
- 九鬼周造 (1939/2016) 『人間と実存』、岩波書店 (岩波文庫)。
- 木田元 (2001) 『偶然性と運命』、岩波書店 (岩波新書)。
- 下程勇吉 (1970/1991) 『増補 宗教的自覚と人間形成』、広池学園出版部。
- 竹内啓 (2010) 『偶然とは何か—その積極的意味』、岩波書店 (岩波新書)。
- 竹内整一 (2016) 『日本思想の言葉—神、人、命、魂』、KADOKAWA (角川選書)。
- 田島正樹 (2006) 『読む哲学事典』、講談社 (講談社現代新書)。
- 田辺元 (1934-35/2010) 「社会存在の論理—哲学的社会学試論」『種の論理』、藤田正勝編、岩波書店 (岩波文庫)、9-186 [編者による注解 449-469] 頁。
- 田辺元 (1961/2010) 「マラルメ覚書—『イジチュール』『双賽一擲』をめぐって」『死の哲学』、藤田正勝編、岩波書店 (岩波文庫)、63-218頁。
- 中村元 [ほか] 訳 (1963) 『ミリンダ王の問い (1)』、平凡社。
- 難波田春夫 (1987/1992) 「私の歴史社会哲学」『近代の超克—難波田春夫 輯遺』、行人社、5-64頁 (初出は『社会哲学』通巻20号、1987年10月)。
- 廣池千九郎 (1928/1985) 『新版 道德科学の論文 第七冊』、モラロジー研究所。
- 廣池千九郎 (1928/1986a) 『新版 道德科学の論文 第一冊』、モラロジー研究所。
- 廣池千九郎 (1928/1986b) 『新版 道德科学の論文 第二冊』、モラロジー研究所。
- 藤田正勝・田中久文 (2016) 「討議 九鬼周造の「生きた哲学」」『現代思想 2017年1月臨時増刊号 九鬼周造—偶然・いき・時間』、青土社、8-31頁。
- 古川雄嗣 (2015) 『偶然と運命—九鬼周造の倫理学』、ナカニシヤ出版。
- 古川雄嗣 (2016) 「「自然支配」と「自然随順」のあいだ—九鬼周造の「自然」概念が問いかけるもの」『現代思想 2017年1月臨時増刊号 九鬼周造—偶然・いき・時間』、青土社、148-163頁。
- 古田徹也 (2017) 「現代の英米圏の倫理学における運の問題」『社会と倫理』No. 32、南山大学社会倫理研究所、3-14頁。
- 古田徹也 (2019) 『不道德的倫理学講義—人生にとって運とは何か』、筑摩書房 (ちくま新書)。
- ブルックス、マイケル編 (2015/2016) 『「偶然」と「運」の科学』、水谷淳訳、SBクリエイティブ。
- 細川幹夫 (1984) 『めぐり合いの構造—性格形成と相性の研究』、広池学園出版部 (広池選書)。
- 宮野真生子 (2014) 『なぜ、私たちは恋をして生きるのか—「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史』、ナカニシヤ出版。
- 宮野真生子 (2016) 「日常・問柄・偶然—九鬼周造と和辻哲郎」『現代思想 2017年1月臨時増刊号 九鬼周造—偶然・いき・時間』、青土社、90-105頁。
- 宮野真生子 (2018) 「偶然性の役割とは何か—『社会存在の論理』と『偶然性の問題』」『福岡大学人文論叢』49巻4号、福岡大学研究推進部、929-953頁。
- 宮野真生子 (2019) 『出逢いのあわい—九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』、堀之内出版。
- ムロディナウ、レナード (2008/2009) 『たまたま—日常に潜む「偶然」を科学する』、田中三彦訳、ダ

イヤモンド社。

モノー、J. (1970/1972) 『偶然と必然』、渡辺格・村上光彦訳、みすず書房。

山口周 (2019) 『仕事選びのアートとサイエンス—不確実な時代の天職探し 改訂『天職は寝て待て』』、光文社 (光文社新書)。

ライプニッツ (1714/2019) 『理性に基づく自然と恩寵の原理』『モナドロジー 他二篇』、谷川多佳子・岡部英男訳、岩波書店 (岩波文庫)、77-94 頁。

ルエール、D. (1991/1993) 『偶然とカオス』、青木薫訳、岩波書店。

和辻哲郎 (1937/1965) 『倫理学 上巻』 改版、岩波書店。

ワッツ、ダンカン (2011/2014) 『偶然の科学』、青木創訳、早川書房 (ハヤカワ・ノンフィクション文庫)。

欧文：

Feinberg, Joel (1962/1970), "Problematic Responsibility in Law and Morals" in his *Doing and Deserving: Essays in the Theory of Responsibility*, New Jersey: Princeton University Press, pp. 25-37 (first published in *Philosophical Review*, 71 (3), North Carolina: Duke University Press, 1962, pp. 340-351). 一邦訳：「法と道徳における問題含みの責任」、望月由紀訳、『倫理学と法学の架橋—フラインバーグ論文選』、嶋津格・飯田亘之編集・監訳、東信堂、2018年、475-487頁。

Krebs, Dennis L. (2011), *The Origins of Morality: An Evolutionary Account*, New York: Oxford University Press.

Krumboltz, J. D. (2009), "The Happenstance Learning Theory" *Journal of Career Assessment*, 17, Los Angeles: SAGE Publishing, pp. 135-154.

Mitchell, K. E., Al Levin, S. & Krumboltz, J. D. (1999), "Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities" *Journal of counseling & Development*, 77 (2), New Jersey: Wiley-Blackwell, pp. 115-124.

Nagel, Tomas (1976/1979), "Moral Luck" in his *Mortal Questions*, Cambridge University Press, pp. 24-38 (first published in *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl., 50, Oxford: Oxford University Press, 1976, pp. 137-151). 一邦訳：「道徳における運の問題」、『コウモリであるとはどのようなことか』、永井均訳、勁草書房、1989年、40-63頁。

Williams, Bernard (1976/1981), "Moral Luck" in his *Moral Luck*, Cambridge U.P., pp. 20-39 (first published in *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl., 50, Oxford: Oxford University Press, 1976, pp. 115-135). 一邦訳：「道徳的な運」、鶴田尚美訳、『道徳的な運—哲学論集一九七三～一九八〇』、伊勢田哲治監訳、2019年、33-65頁。

(キーワード：偶然性、偶然と必然、驚きの情、偶然と運命、独立なる二元の邂逅)

